

第6回（平成29年度）
「看護にまつわるエピソード」
作品集



公益社団法人愛媛県看護協会
看護の日実行委員会

はじめに



5月12日は看護の日です。

近代看護を築いたナイチンゲールの誕生日にちなみ、旧厚生省において1990年に制定されました。それ以来、「看護の心をみんなの心に」をメインテーマに、毎年さまざまな事業が全国各地で開催されています。

今年で6回目を迎えた「看護にまつわるエピソード」の募集には、県内6市町から20作品の応募がありました。厚くお礼申し上げます。

受賞された作品のうち、最優秀賞1点、優秀賞2点、入選3点、奨励賞1点をここに紹介させていただきます。

エピソードに込められたそれぞれの“看護の心”が皆さまを通して地域の方々に広がっていくことを願っております。



あなたの夢、受け継ぎました

西条市 まつ うら ゆかり
松 浦 友香梨

「もしもし、お母さんいますか」妹が入院していた大学病院の病棟直通電話に、幼い私はよく電話をかけていた。日常業務で忙しいはずの看護師さんはいつも優しく母に取り次いでくれた。妹は生まれつきの慢性疾患で入退院を繰り返し、母もまた妹の付き添いで離れて過ごす日々が多かった。当時は携帯電話も普及しておらず、この電話が私たち親子を繋ぐ時間であった。

入院生活が長い妹は明るく、病棟看護師や医師、他の入院患者にも可愛がられていた。そんな彼女の将来の夢は看護師であり、痛い処置をされることもあるが、自分と共に笑ったり、身体的、精神的苦痛に寄り添ってくれた人のように自分も人を癒す存在になりたいと言っていた。しかし病は進行し、確実に彼女を蝕んでいった。歩行困難となり、失明してもなお、彼女は生きたいと必死で戦っていた。そんな中、臓器移植のチャンスが巡ってきた。主治医をはじめ担当看護師は妹本人に移植のメリットと起こりうるリスクをきちんと説明した上で後押ししてくれた。結果的に拒絶反応が起こり、彼女は意識不明となり痙攣を起すようになった。そんな危険な状態でも痙攣の合間に洗髪や全身清拭をし、返答のない会話をしてくれた看護師は生を最期まで諦めなかった彼女と真剣に向き合ってくれたのだろう。

あれから20年後の今、私は新米ナースとなり、日々奮闘している。若くはないが多少の人生経験や、儚くも強く生きた妹の思い、そんな妹を支え癒す看護を目の当たりにしたことを活かしていきたい。そう思いながら私は墓前に手を合わせる。

私はあなたの理想とする看護師になっていますか？





親子3世代

東温市 藤もと けいこ
ふじもと けいこ

我が家は、親子3世代、看護の道を歩んでいる。78歳になる母は、デイケア施設で、今も、看護師として、頑張っている。そんな頑張り屋の母に、兄と私。母一人に、育ててもらった。幼い頃は、兄と二人きりの寂しい夜、母のいない朝。理解すら出来ず、母に当たり、困らせてしまう事も沢山あった。「いざという時のために手に職をつけなさい」そう言われ続けてきた私だったが、寂しい思いが大きく、母と同じ看護師を嫌がってさえいた。しかし、何気ない日常に、街や、病院で……。沢山の患者さんが母に、感謝し、声をかけてもらう姿を何度も、目にしてきた。最初は不思議に思っていたが、大勢の人から感謝される母の偉大さや人間性を尊敬する自分がいた。そして、私も母のような人になりたいと願うようになり、いつしか目標になった。看護師になった私は、希望にあふれ、母と同じ土俵に立てたような気にもなっていた。しかし、毎日が上手くいくとも限らない。落ち込んだり、悩んだり。簡単にいかないことも多かったが、不安や苦しみの先にある患者さんの心の本質に近づくことが出来たとき、それは喜びに変わり、患者さんから感謝される存在になれる事がわかってきた。きっと、母が長年、残してきた心の灯が、今も、多くの人から感謝される存在になっているのだと思う。そして、いつしか自分の娘に、看護師の素晴らしさを語っていた。今、自分が生きている喜び、何気なく過ぎていく時間が価値のあるものだと思って欲しかった。「確かに寂しい思いをしてきましたが、看護師である母を誇りに思っています。お母さんのことを聞かれて、そう答えたからね。」看護学校の試験へ迎えに行った娘から聞かされた言葉。フロントガラス越しに見える澄み切った空が溢れた涙で滲んだ。この春から、看護学校へ進学する娘。母から私。私から娘へ。看護のバトンはきちんと、受け継がれ、親子3世代。これからも前へ進んでいく。





手のぬくもり

松山市 匿名希望

4月のある日、私はがん患者になった。

1年半前から身体の異常に気が付いていたが、がんかもしれないという怖さと、がんではないかもしれないという思いが交差し受診しなかった。

その後も身体からSOSは出ていたが、迷いと恐怖を感じながらも受診という決断には至らず、とうとう身体が最終警告を出し、自ら受診しようと思い専門病院に行った。

検査が行われ、「良いものではないです」と医師から告げられた。

「やっぱりな」という気持ちと「嘘だ」という気持ちで目の前が真っ暗になったのを覚えている。事実を伝えられると「死」という恐怖に襲われた。

一通りの説明のあと、診察室から出て待合所で呆然としたが不思議と涙は出なかった。

後日、精密検査の結果を聞き愕然とした。転移していたからだ。予想していなかった展開について行けず、医師の説明を必死に聞くことに集中した。手術する話がホルモン療法の話に変わり根治できない事を知った。

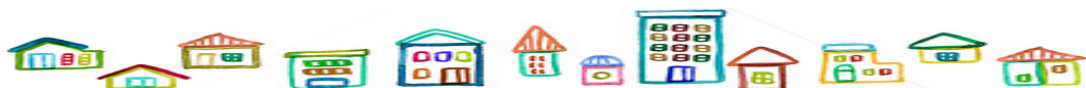
治療までの待ち時間ぼんやりしていたその時、診察に同席していた看護師さんが「冷静に話を聞いていましたね、大丈夫ですか」と声をかけてくれ、一気に心境を語った。

おそらく30分は経過していたが、気持ちが落ち着くまで傍にいてずっと背中を摩ってくれていた。満杯のコップから水が溢れ出したかのように私は泣き崩れた。

看護師だから気丈にというプライドから、診断を受けてこの時まで、こんなに泣けた記憶はなかった。

そして、カチンコチンになっていた気持ちを溶かしてくれたあの手のぬくもりを今も忘れない。

私も、生きて、生きて誰かの固くなった心を溶かせるような人になりたいと思う。





母は太陽

西条市 お越ちとしこ子

台所の勝手口の鍵を開け静かな家の中へ。「ガラガラー」と居間のガラス戸を引く。とたん、「ウッウーッ」と鼻をつく便の臭い。朝日が差し込まない部屋の壁際に、横向きになった小さく丸い母がいる。すぐ電気を付け、窓を開け放す。早く始末をと耳の遠い母に大声を出す。が、一向に応じようとせず、何度も繰り返すと理屈っぽく言い返される。立て続けに私は、怒鳴り口調で甲高い声になる。が、増々の逆効果。30分もの押問答の後、やっと気持ち良い紙パンツに履き替えさせられた。

父が他界してもう30年になる。以来一人暮らしを余儀なくされた母は、寂しさを紛らわす様に畑仕事に精出した。脚、腰に痛みを抱え高齢となるにつれ、日常生活から一つ一つと出来ない事が増え、比例して見事だった畑が荒れていった。あれ程気丈だった母の老いを1年、1年と目の当たりに痛感する。

近距離に住んでいるお陰で頻繁に実家に通える。が、「ああ、今日も荒らげた言い方をしてしまって」と、反省しながらミニバイクを走らせる。

時折だが、すんなりと紙パンツの履き替えが出来ると、「ありがとう」とお礼を言われる日がある。そんな母の言葉にフッと気付かされた。私が自分のイライラした感情を押さえられず、つつい弱い母にぶっつけている。そんな私の胸の奥底を母は感じ取っている。世話をしているつもりが実は、顔を見に来られるだけで私の方がどんなにか癒されていると。少ない会話で過ごすひとときの時間に、無限大で無償の計り知れない愛をもらっていた。母の眼差しは太陽だ。と、自分の愚かさを悔いる。

93歳の今、一人で出来ている事まだまだあるものね。1分、1秒でも長く母との時を共存出来ます様にと父の遺影に合掌し、実家を後にする今日の私です。





患者の夜と看護師の夜

今治市 あべたかこ
阿部 喬子

夜がこんなに長くて、暗くて、寂しいものだと生まれて初めて知った。明日の朝が遠すぎる。

看護師になって一年目の冬。初めて入院することになった。手術で切った右の下腹部が燃えているのかと思うくらい痛くて熱い。寝返りすらままならず、傷口を上にして見たくもない暗い窓の方を向いて横になった。

「今晚は付き添おうか？」気遣って母がこう言ってくれた時はまだ麻酔が効いていて、「大丈夫よ。大手術やないんやけん。」笑顔まで見せて、帰ってしまった数時間前の自分を恨んだ。

人生で初めての手術。とは言っても難しいものではない。短時間で終わり、数日で退院できるようなものだ。大したことはないだろうと甘い考えでいた。たかが数センチ、身体にメスを入れるということはこんなにも苦痛を伴うものであると身を持って経験した。

社会人になり、これまであつという間に毎日が過ぎていった。三交代の勤務にも少しずつ慣れてはきたものの、新しく出合う疾患や処置の学習や勉強会の参加に追い立てられるように毎日を過ごしていた。「患者の立場に立って」とか、「患者の個性を大切に」とか、大事にしている看護観は心にくすぶってはいたが、忘れそうになるくらい疲弊していた。

術後初めて迎えた夜、目を閉じると不思議と職場の病棟が浮かんで、しばらく消えなかった。夜勤で眠れない患者の対応をしたことを思い出す。複数の患者を担当する看護師の夜はあつという間に明ける。しかし、苦痛を感じている患者の夜は、本当に新しい朝が数時間後にやってくるとは思えないくらい長いことをようやく知って、何だか泣けてきた。

患者になった夜が、たくさんのことを教えてくれた。仕事に復帰したら、患者に掛けたい言葉が自然とたくさん湧いてきた。





看護について

松山市 井 せき 理 彩

看護とは何か、看護の定義・イギリスの看護学者フローレンス・ナイチンゲールの教え「看護はすべての患者に対して生命力の消耗を最小限度にするように働きかけることを意味する」と述べられています。アメリカの看護理論家ヴァージニア・ヘンダーソンは「さまざまな諸活動において、健康不健康問わず、患者の健康維持または健康回復後に役立つ諸活動である」と述べています。「患者が元の生活レベルにまで戻っていけるように援助する」ということが看護の包括的な定義であり、看護に対する考えであると思います。患者の体・心身の状態や病状は一人一人違うため各患者の体調や病室環境の調整も考慮した看護を行うことだと思います。

2016年2月中旬頃、母が通院中の病院から県立中央病院の循環器内科に大動脈解離の疑いで救急搬送されました。私が病院の処置室で母の姿を見たとき、酸素マスクや心電図のアラーム音を聞いているうちに不安になり過呼吸になりました。そのとき担当だった看護師が私に呼吸法を教えてくださいました。私の気持ちに手をさしのべてくれたことで落ち着くことができ、優しく的確に接する看護師さんの姿を見て私の中で看護師になりたいと強く思うようになりました。

誠実な看護をするためには積極的に話を聞くコミュニケーション力が必要だと実感しました。患者さんの疑問や不安を言いやすい環境をつくることで精神的なケアにもつながると思います。日々進歩する医療技術を把握し適切なケアをしていくことで患者さんの不安を安心に変えることが大切だと思いました。

看護師の専門的な知識だけでなく、社会人としての知識を広く身につけ会話を身につけながら医療の現場で明確な判断ができる冷静さも必要です。私も看護師になるために幅広い知識と技術を大学で学びたいです。





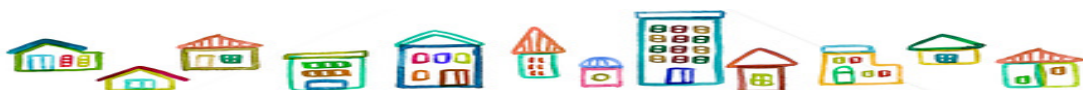
将来の夢

南宇和郡愛南町 やま した ひなの
山 下 日菜乃

私が小学生の時、大好きだった祖母が癌で入院しました。とても元気だった祖母が会いにいくたび痩せていき、喋ることも辛くなっていき、体調が悪い時には数分しか会えない事も何回かありました。毎回会いに行くたびに、とても不安な気持ちになった事を覚えています。薬の効果が効いていて話す事ができた時には看護師さんも交えてお喋りをしたり、祖母が食べたい物を一緒に食べたり楽しい時間を過ごした事もありました。看護師さんが祖母の状態に合わせて優しく接してくれたり、お見舞いに来た私達にもいろいろと配慮をしてくださっている姿を見て、看護師という職業に憧れを抱くようになりました。

祖母が病気で苦しんでいた時、祖母の為に何かできることがないか。どうしたら祖母は元気になってくれるのか。と、いつも考えていました。でも、小さな私は見守ることしかできませんでした。世の中には病気で闘っている人がたくさんいます。祖母にしてあげられなかった分、患者さんの気持ちが分かってくれたいという気持ちが大きくなり、私の夢となりました。

看護師という仕事は、患者さんとのコミュニケーション以外にも、身の回りの世話など体力面できついこともたくさんあると思います。でも、いつも思い出すのは、祖母が嬉しそうに看護師さんと話をしていた姿です。しかし、夢を叶えるためには、多くの事を学ばなければいけません。私は、看護学校への進学を目標に勉強をしています。私の理想は、患者さんが安らげる看護ができる看護師になることです。そのために目標の一つ一つを達成しながら夢に向かって頑張りたいです。



【資料】

第6回「看護にまつわるエピソード」応募者の状況

1.性別

男性	女性	総計
3	17	20

2.年齢

10才代	20才代	30才代	40才代	50才代	60才代	総計
8	0	4	4	2	2	20

3.住所

新居浜市	西条市	今治市	松山市	東温市	西予市	宇和島市	愛南町	総計
1	2	2	3	1	3	1	7	20
(東予)5			(中予)4		(南予)11			

4.職業

高校生	看護師	看護教員	介護職員	無職	総計
8	8	1	1	2	20
	(看護職)9				

平成 29 年度「看護の日・看護週間」記念行事
第 6 回「看護にまつわるエピソード」作品集
平成 29 年 5 月

編 集：公益社団法人愛媛県看護協会、看護の日実行委員会
住 所：松山市道後町 2 丁目 1 1 - 1 4
TEL：089-923-1287

